

## わたしの戦争体験～戦後五十年に寄せて

福岡市東区 小出 レイ子

「10年越しに戦争してきた日本も、今度の戦争は負けるかもしれんネ」  
空襲の残り灯にくすぶる町を眺めながら、母は小声でつぶやきました。

「シーッ、そんなこと言う人がおるから負けるったい」

その頃のわが家は、父が海軍軍属として南方戦線へ派遣され、母は軍需工場から軍服を大風呂敷に背負ってきては穴かがり、ボタンつけ、まつりぐけの夜なべ仕事、私は昭和19年2月に繰り上げ卒業させられ、佐世保海軍施設部勤務の理事生でした。

「忠君愛国」、命令には絶対服従、身なりから髪形までチェックされ、意に沿わない時には「不都合のかどにより解雇する」と突然一方的に言い渡される職場でしたが、軍港の町に生まれ育った私にとって、鎮守府構内にある庁舎に勤めることは大いなる誇りであり、いつも肩に力を入れて勝利の日を夢見ておりました。

小学4年で日華事変が起ってから、艦の入港ともなれば町中に海軍さんがあふれ、休暇をもらった隣のオジさんの手柄話を聞いては目を見張り、胸躍らせたものです。

子供好きの隣のオジさんは、

「中国にはみなし子が多くて、連れて帰って来たくなる」とよく言っておられました。

近頃ウーロン茶のコマーシャルで、その時涙して聞いた孤児の調べがテレビから流れて驚いております。

『シナの町のシナの子

親のない子はただ一人

売られて行きます上海へ

坊やはよい子だネンネシナ

今夜のお夢は何の夢

悲しい悲しいお夢です』

このように悲しい詞が記憶の底からすぐにあふれ出てきました。

さて、入港上陸で浮き上がった心も、サーベルの音を響かせあわただしく坂を上がって行く  
巡査さんの姿を見ると、「ああ、またか………」と冷めていきます。私の家の上の山では、出航前になると決まって若い海軍さんが首を吊るのでした。泣く子もだまる髭の巡査さんも野次馬の前では威厳なく、誰も彼もその海軍さんをまともに見ることはできませんでした。

昭和20年ともなれば、この海軍の町は空襲空襲の連続、朝の「行って参ります」は別れの挨拶とさえ言われるようになりました。はらわたをえぐり出すようなサイレンを天井のない部屋（焼夷弾がひっかからないように天井をはずせという命令による）で聞いては跳び起きる毎日毎晩。しかし私たち母子ときたら、モンペのまま横になり、貴重品は腰に巻いて、枕元には

防空頭巾、水筒、鞆と万全の備えをしながらも、半分寝ながらモンペのゴムのところでモゾモゾと動く蚤を指で押さえて、プツンとつぶしては「は～……」などと何とも言えぬ心地よさを感じていたり、時には「アアー暑かー。もうどうなってもよか」と、下着一枚になって寝たり……その気持ち良さといったら……。こういう状況の中で、何とものんきでおかしなことをやっていたものです。しかし、戦災にもあわず、畳の上で寝ていられたからこそではあります。

さて、軍歌も『勝って来るぞと勇ましく』から『海行かば水づく屍』となった昭和20年の梅雨時、こんなことがありました。しとしとと降る雨の中、数珠繋ぎにされた深編笠の予科練生7、8人とすれちがったのです。スフ入りのヨレヨレになった7つボタンの軍服、細い足の巻脚絆も垂れ下がり、本当に哀れな姿でした。周りでは「非国民が………」「脱走兵たいー」などと、心をえぐるような言葉がささやかれていました。深編笠の奥に、伏し目の軍国少年の顔を見た時は、血の引く思いで私はその場に凍り付き、振り向くこともできませんでした。囚人となって、その後どんな扱いを受けられたか、今でもあの幼さの残る顔が忘れられません。

バリバリの軍国少女の胸に「この戦争は、本当のところどうなるのであろうか？」という疑問を持たせたものは、前述の出来事の他に次のような日常の中にもありました。

海軍施設部では、朝鮮から徴用されたたくさんの人々が山で作業をしておられました。

そして食事時には、当番の人が山から降りてきて、私達の烹炊所で食事を受け取るようになっていました。

しかし、どんなに早めに来て待っていても、意地悪な烹炊所長（海軍兵曹長）はすぐには渡しません。必ず、食缶の洗い方が悪い、態度が悪い、気に入らないと言っては、食缶を投げつけたり殴る蹴るの暴行を散々はたらき、やっと最後に偉そうに渡す、これを毎日のように繰り返していました。

ある朝、出勤してみますと、烹炊所の内外がざわめいております。堪忍袋もこれまでだったのか、それとも終戦が近いのではという情報が入っていたのか。

「所長が斧で頭を割られて殺されたって」

「ザマーミロ」口には出ねど気持ちは同じ、皆の眼が言っていました。そして、どうかその人が捕まりませんようにと祈りました。その後すぐに終戦でしたし、噂も聞きませんので、たぶん大丈夫だったのではないのでしょうか。

8月9日、焼け跡の電柱に立てかけられた戸板に、

「本日、ソ連参戦ス、長崎ニ新型爆弾落ツ」

黒々とした文字を見ながら、私は立ち尽くしました。ああ、やはり日本は本当に負けるんじゃないかならうか……。

そして8月15日、いつか母が言ったとおり、日本は敗れました。

あんなに勇んで征った父でしたが遺骨もなく、今考えれば犬死にだったと思います。「今は夢のような世の中ヨ」「言いたい事も言えなかったネ」と、日々亡父に話しかけております。

毎朝、朝礼で合掌していた九軍神の辞世

国の為、何かおしまん若桜

散って甲斐ある命なりせば

嫌なことは記憶からは除いていく人間の便利な法則をはずれ、半世紀もたったとは思えないほどこれらの体験の全てが鮮明に焼き付いていて、どんなに歳を取ってもますますクッキリと形をなしてくるのです。